
「平成29年度 飼料用米多収日本一」 受賞者の取組概要

【単位収量の部】

農林水産大臣賞

政策統括官賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

1 河野 享功（北海道）

2 佐藤 通之（北海道）

3 兵藤 卓弥（山形県）

4 高橋 豊明（北海道）

5 山田 和正（北海道）

6 堀越 重助（山形県）

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞

政策統括官賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

7 海地 博志（山口県）

8 株式会社 樋口農園（北海道）

9 出島 博昭（秋田県）

10 農事組合法人 ふながわ（富山県）

11 門田 康正（福岡県）

12 長沼 靖夫（山口県）

1 河野 享功(北海道美唄市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
きたげんき	約1ha	968kg/10a	382kg/10a(586kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族3人(本人、両親)で経営する専業農家。
- 米を中心とした複合経営、主食用米と飼料用米の輪作体系

【作付品目】

- ・主食用米:
ゆめぴりか、ふっくりんこ、 10.1ha
ななつぼし、おぼろづき
- ・飼料用米:きたげんき 1.0ha
- ・麦:きたほなみ 6.2ha
- ・大豆:ユキホマレ 3.9ha
- ・なたね:キザキノナタネ 3.6ha

【取組のきっかけ】

- 基盤整備事業後の大区画化ほ場に対応する作付体系の1品目として飼料用米に取り組む。

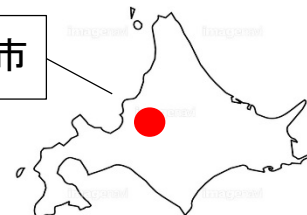
【取組概要】

- 単収向上に向けて、①高収量が見込める栽培条件の良いほ場を飼料用米用に選定、②基肥6kgN/10a(標肥:4.5kgN/10a)、追肥7.2kgN/10a(標肥:5.4kgN/10a)の多肥栽培を実施。
- 生産コスト低減を図るため、①植栽密度を慣行23~24株/㎡から18~19株/㎡に減らす疎植栽培を行うことで、育苗箱数が50枚/10aから42枚/10aに削減されるほか、労働力を低減、②初中期一発剤により、地域慣行と比べて除草回数を減らすことにより、資材費、労働力を低減しつつ、適正な雑草管理を実現、③長期間の効果が期待できる「北おろし箱粒剤」による苗箱施用による省力化、④粳を半乾状態のままJA施設にバラ搬入することで、乾燥及び運送経費の軽減、包装容器代の削減、等の取組を実施。
- 地域の取組として、稲わらの全量を粗飼料として畜産農家に供給し、耕畜連携に取り組む。



北海道

美唄市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
きたげんき	約2ha	907kg/10a	321kg/10a(586kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族2人(本人、妻)で経営する専業農家。
- 水稻専作、経営面積約15ha

【作付品目】

- ・主食用米:ゆめぴりか、ななつぼし 12.6ha
おぼろづき
- ・飼料用米:きたげんき 2.0ha

【取組のきっかけ】

- 水稻専作のため、他の作物の新規導入は作業機械等の初期投資が必要となるため、水稻作付による転作として飼料用米を選択。

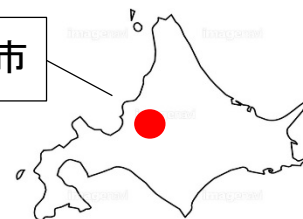
【取組概要】

- 単収向上に向けて、施肥量は基肥で主食用米の1.2倍に当たる6.7kgN/10a、追肥は主食用米と同量の3kgN/10aを施肥し、施肥効率の向上を図っている。
- 生産コスト低減を図るため、①初中期一発剤による除草で、地域慣行と比べて除草回数を減らすことにより、資材費・労働力を低減しつつ、適正な雑草管理を実現、②長期間の効果が期待できる「フェルテラ箱粒剤」による苗箱施用と、ラジコンヘリによる共同防除により省力化、③地域機械利用組合とレーザー均平機を共同利用し、作業効率の向上に貢献するとともに機械コスト低減、④粃を半乾状態のままJA施設にバラ搬入することで、乾燥及び運搬経費の軽減、包装容器代の削減、等の取組を実施。
- 地域の取組として、稲わらの全量を粗飼料として畜産農家に供給し、耕畜連携に取り組む。



北海道

美唄市



ひょうどう たくや
3 兵藤 卓弥(山形県酒田市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
べこあおば	約2.7ha	848kg/10a	231kg/10a(617kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成29年2月に経営委譲され、本人と両親による家族経営
- 主食用米、酒造好適米、加工用米及び飼料用米の水稻専作

【作付品目】

- ・飼料用米:べこあおば 2.7ha
- ・酒造好適米:出羽燦々、雪女神 2.7ha
- ・主食用米:はえぬき、つや姫 1.7ha
- ・加工用米:はえぬき 0.1ha

【取組のきっかけ】

- 水稻での転作が可能であり、出荷契約先の集荷業者からの勧めもあり、平成29年産から飼料用米生産を開始。また、集荷業者から種子供給が可能で、粒が大きく、短稈で茎が太く倒伏しにくい「べこあおば」を選定。

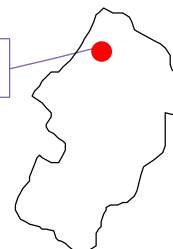
【取組概要】

- 単収向上のため、①耕起時にケイカル30kg/10a、元肥3kgN/10aに加え、移植時に3.6kgN/10aを側条施肥し、有効茎数25本/株を確保、②基肥に加え、中干し後(7月中旬)に1kgN/10aと出穂前(7月末)に2kgN/10aの2回の追肥で、窒素成分9.6kgN/10aを施用。
- 生産コスト低減を図るため、①田植え後の除草剤効果を高めるため、土が露出しないように水管理を徹底し、除草剤を1回のみの散布(1kg/10a)としている、②病虫害防除は自身も所属する無人ヘリ組織により実施し、慣行栽培と比較し、薬剤費約2割減(大容量の共同購入の効果)、これらの取組により人件費(労働時間)も約5割減を実現、等の取組を実施。
- 水稻のみの作付とすることで作業集約を図るとともに、品種毎に収穫時期をずらすこと(酒造好適米→飼料用米→主食用、加工用米)で作業の効率化を図っている。
- 飼料用米の倒伏が発生しないよう、酒造好適米の栽培技術を飼料用米に応用して、栽培管理を確立したい。



山形県

酒田市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
きたげんき	約1.8ha	893kg/10a	307kg/10a(586kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族2人(本人、妻)で経営する専業農家。
- 米、麦、大豆の複合経営。
- 上美唄米麦営農組合の構成員として、収穫から乾燥・調製作業を共同で実施。

【作付品目】

- ・主食用米: ゆめぴりか、ななつぼし4.4ha
おぼろづき
- ・飼料用米: きたげんき 1.8ha
- ・麦: ゆめちから、春よ恋 8.9ha
- ・大豆: ユキホマレ 4.2ha
- ・アスパラガス、たまねぎ 0.1ha

【取組のきっかけ】

- 収穫時期の分散と作業負担軽減から、飼料用米に取り組む。

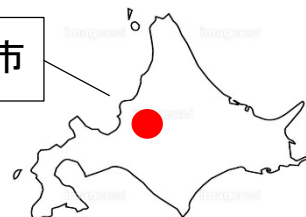
【取組概要】

- 単収向上に向けて、主食用米に比べて、追肥で1.5倍の4.2kgN/10aを施用。
- 生産コスト低減を図るため、①地域共同育苗センターで共同播種作業を実施し省力化、②初中期一発剤により、除草回数を減らし、資材費・労働費を抑制しつつ、適正な雑草管理を実現、③ラジコンヘリによる共同防除で省力化、④構成員として参加する上美唄米麦営農組合所有のもので乗用田植機、乗用管理機、コンバインなどの機械作業を共同化することで、作業効率の向上及びコスト低減、⑤近隣の大型共同乾燥調製施設において、乾燥調製した後、粳のままフレコン出荷することで、乾燥調製及び運搬経費の軽減、包装容器代の削減、等の取組を実施。
- 地域の取組として、稲わらの全量を粗飼料として畜産農家に供給し、耕畜連携に取り組む。



北海道

美唄市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
きたげんき	約5.5ha	840kg/10a	254kg/10a(586kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族4人(本人、妻、両親)で経営する専業農家。
- 米を中心とした複合経営。

【作付品目】

- ・主食用米: ななつぼし、おぼろづき 2.3ha
- ・飼料用米: きたげんき 5.5ha
- ・加工用米: ななつぼし 2.5ha
- ・緑肥: キカラシ 0.2ha
- ・景観形成作物: キカラシ 12.2ha

【取組のきっかけ】

- 米を中心とした複合経営のため、他の作物の新規導入は作業機械等の初期投資が必要となるため、水稻作付による転作として飼料用米を選択。

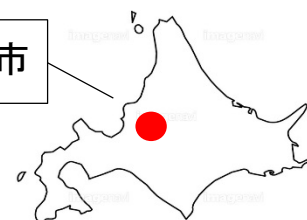
【取組概要】

- 単収向上に向けて、肥料は、基肥として主食用米と比べて1.3倍の6.4kgN/10aを、追肥は主食用米と同量の4.9kgN/10aを施用。
- 生産コスト低減を図るため、①初中期一発剤により、地域慣行と比べて除草回数を減らし、資材費、労働力を低減、②病虫害防除は、慣行では葉いもち剤の本田防除1回と出穂後に2回の散布を行っているところ、1回のみとし省力化、③構成員として参加する沼の内営農組合所有のもので、トラクター、コンバイン、乾燥機などの機械作業を共同化することで、作業効率の向上と経費低減、等の取組を実施。
- 地域の取組として、稲わらの全量を粗飼料として畜産農家に供給し、耕畜連携に取り組む。



北海道

美唄市



6 堀越 重助(山形県天童市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
べこあおば	約1.7ha	835kg/10a	183kg/10a(653kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 夫婦及び子息による家族経営(労働力3名)(おうとうの収穫作業は雇用あり。)

【作付品目】

- ・主食用米:つや姫、はえぬき 20.5ha
- ・加工用米:はえぬき 3.7ha
- ・飼料用米:べこあおば 1.7ha
- ・おうとう:佐藤錦、紅秀峰 0.8ha

【取組のきっかけ】

- 出荷契約先の集荷業者から勧められ、種子供給を受けたこともあり、平成22年から、粒が大きく、短稈で茎が太く倒伏しにくい、「べこあおば」で飼料用米栽培に取り組む。

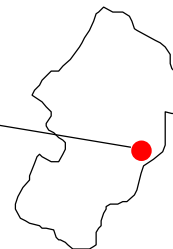
【取組概要】

- ほ場の取水条件が悪いため、田植え時の入水は、代掻き時に張った水を一端、排水路に貯めポンプで汲み上げて再利用している。この結果、春作業時に施肥した基肥窒素成分等が含まれた高栄養価の水を水田に再還元することになり、高単収を実現。
- 温湯消毒、60株/坪(慣行70株/坪)の疎植栽培、基肥一発型の施肥体系、立毛乾燥等のコスト低減の取組を実施し、地域慣行栽培に比べて約4割のコスト低減を実現。
- 作業効率を上げるため、作業施設周辺農地の面的集積を行い、団地化を図っている。以前は、17haを耕作していたが、12年前から近隣農地の集積を進めて、現在、水田面積は27haとなった。
- 主食用米で行っているV溝直播栽培では、移植栽培の2倍の播種量が必要なため、現在、「べこあおば」は移植栽培を実施。30年産では粒が小さく密苗により苗箱数を削減できる「ふくひびき」を作付予定。



山形県

天童市



7 かいち ひろし 海地 博志(山口県山口市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号、みなちから	約2.5ha	867kg/10a	330kg/10a(537kg/10a)

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人と妻)、
農繁期には延べ7名を期間雇用
- 近隣農家(12～15経営体)の乾燥・
調製作業を受託

【作付品目】

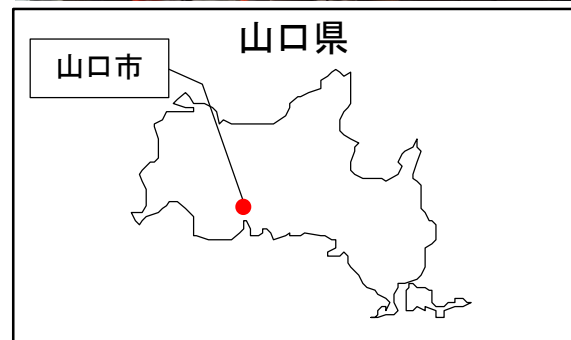
- 主食用米
中生新千本、ヒノヒカリ、山田錦等
3.2ha
- 飼料用米(種子用を含む):
北陸193号、みなちから、ホシアオバ等
3.3ha

【取組のきっかけ】

- 実需者の“「エサも国産で」食料自給率UP!”と食の安全・安心へのこだわり、耕畜連携(資源循環型サイクル)を基本とした取組に共感するとともに、飼料用米の交付金によって経営の安定化が図れることを期待して、平成22年産から本格的な飼料用米(当初は「モミロマン」)生産に取り組む。

【取組概要】

- 平成23年産から、より多収性で耐倒伏性に優れる「北陸193号」に変更。地域での栽培に適し、主食用米との作期分散や主食用米乾燥・調製後の収穫等作業によりコンタミ防止が図られている。なお、この品種は脱粒性が高いため極度の立毛乾燥には注意が必要であること、株張りが良すぎ草茎が固いため、地上高30cmの部分进行刈り取ることで収穫時のコンバイン負荷を軽減。
- 生産コスト低減を図るため、①植栽密度を地域の慣行60株/坪から50株/坪に減らす疎植栽培により、資材費、労働力を低減、②実需者から鶏糞堆肥の無償供給を受ける耕畜連携の取組と、基肥・追肥に安価な単肥(硫安・尿素)の使用によって肥料費を低減、③病虫害防除剤の苗箱散布、除草剤の移植時同時散布により労働力を軽減、④実需者へフレコン出荷することで包装容器代及び運搬経費の削減、等の取組を実施。
- 実需者と実需者に出荷する他の飼料用米生産者が連携し、生育診断等を実施する現地圃場視察会等を行うことにより、生産者同士が切磋琢磨し、単収向上を目指している。
- 西日本農業研究センターと連携し、2年前から新品种(「みなちから」、「中国222号」)の実証圃場として、取り組みを実施。



8 株式会社 樋口農園（北海道美唄市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
きたげんき	約5.5ha	899kg/10a	313kg/10a(586kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族3人(本人、妻、息子)で経営する専業農家。
- 米を中心にメロン、南瓜等の販売野菜を取り入れた複合経営。
- 平成28年設立、パート5名雇用(5月から約3ヶ月間)

【作付品目】

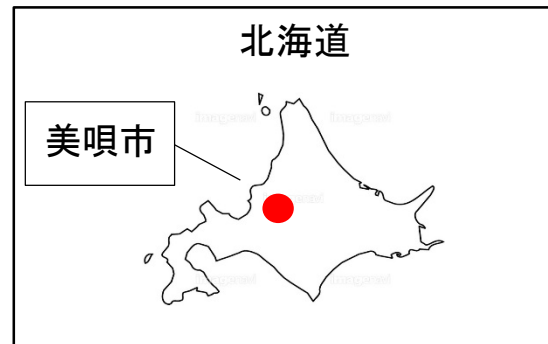
- ・主食用米: ゆめぴりか、ななつぼし 14.0ha
おぼろづき
- ・飼料用米: きたげんき 5.5ha
- ・麦: ゆめちから 3.1ha
- ・大豆: ユキホマレ 4.7ha
- ・メロン、南瓜、野菜等 0.7ha

【取組のきっかけ】

- メロン・南瓜等の販売野菜を取り入れた複合経営のため省力化可能な飼料用米を選択し、27年産から「たちじょうぶ」で作付開始。

【取組概要】

- 29年産からは成熟期が早く大豆の作業時期と重複しない「きたげんき」に品種変更。
- 単収向上に向けて、①土壌改良材として根の活力が増し、増収が見込める「粒状ケイカル」(40kg/10a)を使用、② 肥料は、基肥として主食用米の1.3倍の8kgN/10aに、追肥として主食用米と同量の5.4kgN/10aに加え、幼穂形成期頃に硫安15kg/10aを施用、等の取組を実施。
- 生産コスト低減を図るため、①初中期一発剤により、地域慣行に比べて使用回数を減らしながら適正な雑草管理を実現、②主食用米では幼穂形成期と出穂期の2回の病虫害防除を行うのに対して、出穂期に1回のみ(トレボン粉剤DL3kg/10a)とし、資材費、労働力を低減、③粳を半乾状態のままJA施設にバラ搬入することで、乾燥及び運搬経費の軽減、包装容器代の削減、等の取組を実施。
- 地域の取組として、稲わらの全量を粗飼料として畜産農家に供給し、耕畜連携に取り組む。



いしま ひろあき
9 出島 博昭(秋田県大館市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
秋田63号	約1.8ha	809kg/10a	260kg/10a(549kg/10a)※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 夫婦中心による家族経営
- 機械の共同購入や、適切な追肥等によりコスト削減を実現

【作付品目】

- ・主食用米:あきたこまち、めんこいな、きぬのはだ 4.2ha
- ・飼料用米:秋田63号 1.8ha
- ・アスパラガス 0.3ha
- ・その他 0.1ha

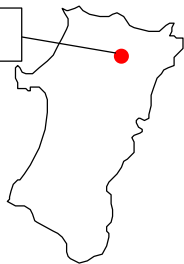
【取組のきっかけ】

- 飼料用米の交付金によって経営の安定化が図られることを期待して、飼料用米生産に取り組む。品種は地元JAからの勧めもあり、「秋田63号」を選定。



秋田県

大館市



【取組概要】

- 耐倒伏性に優れ、いもち病にも強く、地域での栽培に適するという特性を踏まえ、「秋田63号」を選定。
- 地元JAが運営する展示ほ場より得た情報をもとに追肥のタイミングと量を調整しており、少ない追肥で多収を実現。(施肥量:主食用米より2割減、施肥時期:幼穂形成期に1kgN/10a)
- コンバインを地域の農業者4人で共同購入し、機械コストの低減、省力化生産に取り組む。
- 主食用米はJA施設、飼料用米は自己保有施設で乾燥・調製し、コンタミの防止に努めている。
- 作業競合が生じないよう、主食用米(早生品種)と飼料用米(晩生品種)の作業分散を実施。その際、晩生品種である飼料用米を先に播種・育苗・定植することによって多収に必要な生育期間を十分確保。
- 29年産は低温が続き、地域での水稻生育が著しく悪い中、適切な追肥等により、多収を実現。
- 地元JAからの依頼により自身のほ場を「秋田63号」展示ほ場として協力し、地域の飼料用米栽培の普及に貢献。

10 農事組合法人ふながわ(富山県下新川郡朝日町)

しもにいかわぐんあさひまち

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約4.3ha	845kg/10a	297kg/10a(548kg/10a) [※]

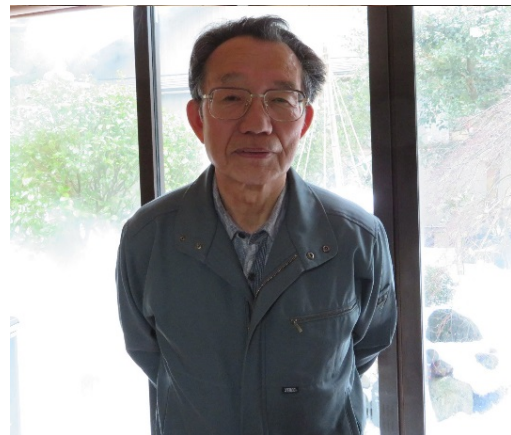
※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 将来的な地域の担い手確保に向けて集落営農組織を立ち上げ、平成19年に法人化
- 代表者: 由井 久也 よしい ひさなり
- 組合員[H29]: 33名

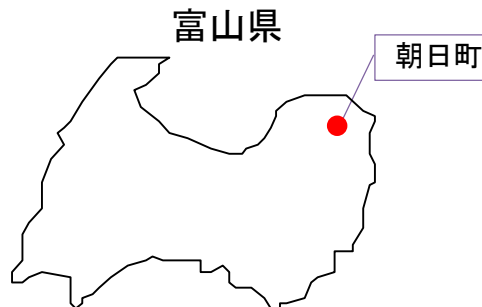
【作付品目】

- ・主食用米: コシヒカリ 37.6ha
- ・飼料用米: やまだわら 4.3ha
- ・大豆: エンレイ 8.4ha
(うち麦後5.9ha)
- ・大麦: ファイバースノウ 5.9ha



【取組のきっかけ】

- 平成27年の大区画ほ場整備(一筆1ha区画)後、飼料用米を勧められ、1haから作付けを開始。倒伏しにくく、作期分散も図られることから、28年以降、種子供給体制の拡充にあわせ、徐々に作付面積を拡大。



【取組概要】

- 土づくりは、ケイカルにリン酸、カリを加えた配合肥料(120kg/10a)と鶏糞(100kg/10a)を施用。
- 肥料は、基肥一発肥料(21-14-14)(45kg/10a)に、追肥として流し込み施肥(15-12-12)(10kg/10a)を施用。
- 飼料用米が漏生イネとして主食用米に混入することを防止するため、飼料用米のほ場を固定。
- 主食用米の移植栽培→主食用米の直播栽培→飼料用米の順に収穫できるよう作付けし、作期を分散。
- 除草剤(フロアブル剤)を水口施用し、畦畔には芝(センチピートグラス)を植えて除草労力を軽減。また、病虫害防除は、全面無人ヘリによる共同防除により労力を軽減。
- 入水(代掻き(4月下旬)→湛水管理(田植期(5月上旬～))→中干し(6月中～下旬)→間断かん水→飽水管理(幼穂形成期～)→湛水管理(出穂～登熟期)→落水(9月中旬)→収穫(10月上旬)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	約2.5ha	787kg/10a	286kg/10a(501kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族2人(本人、妻)で経営する専業農家。
- 水稻を中心に、イチゴ・野菜を栽培

【作付品目】

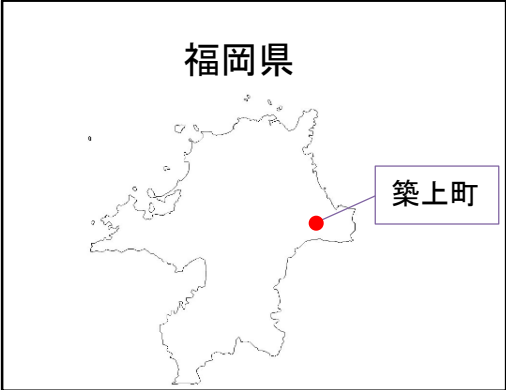
- ・主食用米:夢つくし 2.5ha
- ・飼料用米:ミズホチカラ 2.5ha
- ・イチゴ:あまおう 15a
- ・直売所等向け野菜: 2a

【取組のきっかけ】

- 平成20年から町内の養鶏業者が地元の飼料用米の使用を開始したが、需要の増加に伴う養鶏業者からの要請を受け、平成21年産から飼料用米の取組を開始。

【取組概要】

- 飼料用米は「ミズホチカラ」(6月中旬田植、11月中旬収穫)、主食用米は極早生品種「夢つくし」(5月下旬田植、9月中旬収穫)、イチゴは「あまおう」(9月下旬定植、12月上旬～5月中旬収穫)を作付けし、作業時期が重複しないよう工夫。
- 施肥は、基肥として養鶏業者から供給される乾燥鶏糞(360kg/10a)に加え、基肥一発肥料(12.5 kgN/10a)を施用。
- 栽植密度は通常の水稲栽培と同様に60株/坪とし、天候やほ場の様子を見ながら、細かな水管理を実施するとともに、間断かん水による浅水管理の徹底など地域の栽培暦で推奨する栽培方法を励行し、高収量を実現。
- 水管理や肥培管理の効率向上のため、大きなほ場への優先的な飼料用米作付けに加え、団地化を推進。また、飼料用米が漏生イネとして主食用米へ混入することを防止のため、飼料用米のほ場を固定。
- 厳冬期の浅耕、ほ場の均平化及び田植後の浅水管理の徹底により、地域で問題となっているスクミリンゴガイの食害を最小限に抑制。
- 乾燥後は粳の状態のまま、ただちに養鶏業者の倉庫へフレコン出荷することで、粳摺や保管等にかかるコストを削減。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	約1.0ha	788kg/10a	261kg/10a(527kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人と妻)
- 近隣の飼料用米生産者との共同出資で飼料用米専用乾燥機等を設置、共同利用による経費節減を図る。

【作付品目】

- 主食用米
コシヒカリ 0.8ha
- 飼料用米(種子用を含む)
北陸193号、夢あおば 1.2ha

【取組のきっかけ】

- 実需者と飼料用米生産者の耕畜連携(資源循環型サイクル)を基本とした取組に共感し、平成22年産から飼料用米生産に取り組む。

【取組概要】

- 平成22年産から、多収性で耐倒伏性に優れる「北陸193号」で取り組んでおり、主食用米との作期分散が図られている。飼料用米専用乾燥機を使用することで、コンタミ防止を徹底している。この品種は、株張りが良すぎ草茎が固いため、主食用品種より高い部分を刈り取ることで収穫時のコンバイン負荷を軽減。
- 生産コスト低減を図るため、①植栽密度を地域の慣行60株/坪から45～50株/坪に減らす疎植栽培により、資材費、労働力を低減、②実需者から鶏糞堆肥の無償供給を受ける耕畜連携の取組と、基肥・追肥に安価な単肥(塩安)の使用によって肥料費を低減、③除草剤の移植時同時散布により労働力を軽減、④実需者へフレコン出荷することで包装容器代及び運搬経費の削減、等の取組を実施。
- 実需者と実需者に出荷する他の飼料用米生産者が連携し、生育診断等を実施する現地圃場視察会等を行うことにより、生産者同士が切磋琢磨し、単収向上を目指している。

